

# おおっ! お おおか! 再発見 大岡集楽学校

時をこえたつながりあい・地区をこえたささえあい「大岡集楽しゅうらく」づくり

大岡全十区をフィールドに歩きながら考える『集楽学校』。第一回は中牧、そして第二回は五ヶ村です。「であい・ふれあい・まなびあい」から「つながりあい・ささえあい」へテーマに、今年と来年で大岡を北から順に探訪していきます。各区をめぐるながら、地元の方からの説明や宮下先生の解説を交え、先人の声に耳を澄ませ、地域に伝えられた文化を掘り起こし、明日の「集楽」を皆で共に考えます。

主催／大岡住民自治協議会  
共催／長野市大岡支所  
大岡中学校・大岡小学校

其之二  
**五ヶ村**  
ごかむら  
平成27年  
**8/8(土)**

- ① 樋知大神社周辺
  - ② 聖新田と高堰 (たかせぎ)
  - ③ 雨池の観音堂
  - ④ 十王堂と筆塚
  - ⑤ 樋知大神社郷宮・秋葉社
- \*昼食  
五ヶ村の方による協力
- ⑥ 牛伏山高厳寺
  - ⑦ 宮下先生のお話・座談



# 1 桶知大神社奥社

◆霊峰聖山麓の中腹に鎮座、水を分配し灌漑に供する水分神（みくまりのみかみ）、倉稻魂命（うがのみたまのみこと）を御祭神とする。お種池は聖山北麓や善光寺平南部や筑北地域から信仰・参拝がある。

◆往古は峯に御座があつたと伝えられ縁起によると文應元年（二二六〇）に修験僧・学道上人が「高栖の峯」に登られた時にすでに鳥居が望まれたと記される。

◆五月三日と十月一日が祭日。

## パワースポット 奥社参道杉並木



◆参道に杉八十七本、推定樹齢四〇五〇〇年、特に大きな御神木は直径二六七センチ、特別な聖域。知る人ぞ知る、パワースポット。

## 神聖な泉：お種池



◆六つの水源と高峰寺 ◆学道上人のお墓  
◆お種池 かんがいの種水と雨乞いの池として知られる、県の「信州の名水・秘水」の一つ。いまだかつて一度も涸れた事は無いという清く水は常時水温8〜9度。池に入り水を濁すと雨が降ること、聖山北麓や善光寺平南部や筑北地域から雨乞いに行ってくる。

◆周囲のブナの原生林四二〇本

◆希少植物群（ミドリヒメザゼンソウ、スミレサイシンなど）

◆「極秘情報」ヒメボタルの一大生息地

## 桶知大神社略縁起

聖山（標高凡そ一五〇〇米、近郷随一の山）は、往古は高栖の山と称し、山頂を高栖の峰とよばれ、峰にかかる雲の状態が天候を占う事は、村内もとより遠く安曇野、筑摩、川中島平に於いても、今昔不変の習慣である。その昔、高栖の山は人跡未踏の大森林であった。御社は始め高栖の峯に御坐あつたが嵐強く破損はげしきため、小高栖の峯に転じ、又北麓なるお種池（田苗池とも云う）のほとりに三転御坐なされ、北殿の社殿ですでに武水別の神と奉称された。今を去る七百七十余年前、亀山天皇の文應元年、修験僧、学道が高栖の峯に登られし時、すでに戌亥の方に當つて、華表（鳥居）が望まれた、と記されている。武水別命は、諏訪明神建御名方刀美の第二の御子で実に更級郷開拓の祖神に坐す。故に清和天皇の貞観六年六月朔日従二位に昇叙、格調高い神であるが、修験僧学道聖人が正應五年六月入定し、その遺弟等が聖人の遺徳を領し、大威徳権現と之を崇敬し、長い間、聖の権現と般から通称されたが、明治四年四月「差上申済口証書の事」の一冊により、武水別の御神で武水別神社に相称されし事が明らかとなり、聖山大威徳権現の称号は廃止された。桶知大神社の称号は松代藩佐久間象山の奉称で、水分の命より給わりし水を水路（樋）で民のくらしを

治め司る（知）大神なる由で、その峯は八峯、源泉湧出先に四十八口、桶知本源水別流末御神恩に浴する村々、実に七十五村に及ぶもので、その尊崇敬神は素より旧（ひさし）きものである。昼猶（なお）暗き大森林の中に鎮坐ましますため祭祀も疎遠になりしため郷宮を設け司りしも、近年聖山全山帯の観光開発に併び当神社は観光の象徴として甦り、祭祀も奥社で行われ、氏子の芳志で鳥居、宝蔵庫等を始め、参道の補修もなされ、参詣者も多く益々隆昌で、鬱蒼たる杉並木と二丈余尺の御神木と廣大な源始林、往古そのままのお種池は、千年、二千年か計り知れない昔を忍ぶに足り満ちるものがある。

## 桶知大神社略縁起

聖山（標高凡そ一五〇〇米、近郷随一の山）は、往古は高栖の山と称し、山頂を高栖の峯とよばれ、峰にかかる雲の状態が天候を占う事は、村内もとより遠く安曇野、筑摩、川中島平に於いても、今昔不変の習慣である。その昔、高栖の山は人跡未踏の大森林であった。御社は始め高栖の峯に御坐あつたが嵐強く破損はげしきため、小高栖の峯に転じ、又北麓なるお種池（田苗池とも云う）のほとりに三転御坐なされ、北殿の社殿ですでに武水別の神と奉称された。今を去る七百七十余年前、亀山天皇の文應元年、修験僧、学道が高栖の峯に登られし時、すでに戌亥の方に當つて、華表（鳥居）が望まれた、と記されている。武水別命は、諏訪明神建御名方刀美の第二の御子で実に更級郷開拓の祖神に坐す。故に清和天皇の貞観六年六月朔日従二位に昇叙、格調高い神であるが、修験僧学道聖人が正應五年六月入定し、その遺弟等が聖人の遺徳を領し、大威徳権現と之を崇敬し、長い間、聖の権現と般から通称されたが、明治四年四月「差上申済口証書の事」の一冊により、武水別の御神で武水別神社に相称されし事が明らかとなり、聖山大威徳権現の称号は廃止された。桶知大神社の称号は松代藩佐久間象山の奉称で、水分の命より給わりし水を水路（樋）で民のくらしを

平成 27 年に奥社鳥居が新造された際、記念石碑も建立された。その原文がこの「桶知大神社略縁起」



## 往古から知られた特別な地



お種池は大旱魃の時、池を濁すと雨が降ると云われ、今でも遠近より雨乞い祈願に人々が訪れます。記録では正徳元年（1711）藩主真田公雨乞祈願、御神徳高さにより銭百貫匁を奉納、また六文銭の御幕一張りを寄進せられたと伝えられています。

## 経年の経緯



千曲市八幡にある式内社・武水別神社は明治に入って旧社名に復したもので、旧称は「八幡宮」。現在も「八幡（やわた）さま」の通称があります。有名な上杉謙信の願文も八幡宮となっています。明治の神仏分離時に申し出により延喜式内社武水別の名称使用が決まりました。桶知大神社では十世紀頃に更級郡四ノ宮荘に里宮が置かれたとも云われますが詳細はわかりません。長い時を経るうちに支える勢力や名称の時代変化があったようです。

## 2 聖新田と高堰

たかせぎ

◆「堰・せぎ、せげ」は水流をせき止めることによって水位を上げ水を貯留し用水路などへの取水を容易にし、計画的な分流を行ったもので、大岡の各地には沢や川を巧みに利用した堰が古くからみられる。小村の形成や共同体の維持とも関連し、江戸時代から現代へ時をこえた財産。現在は堤体の高さでダムとの名称区別する。

◆五ヶ村にはおもに「高堰水路」と「慶師水路」があり、特に五ヶ村と四ヶ村から棚原までを流れる「高堰」は大規模なもので大岡一の長さを誇り、山肌に用水を切り開き開拓した先人の努力が伺える。

五ヶ村を潤す

たかせぎ

大岡一の用水路「高堰」

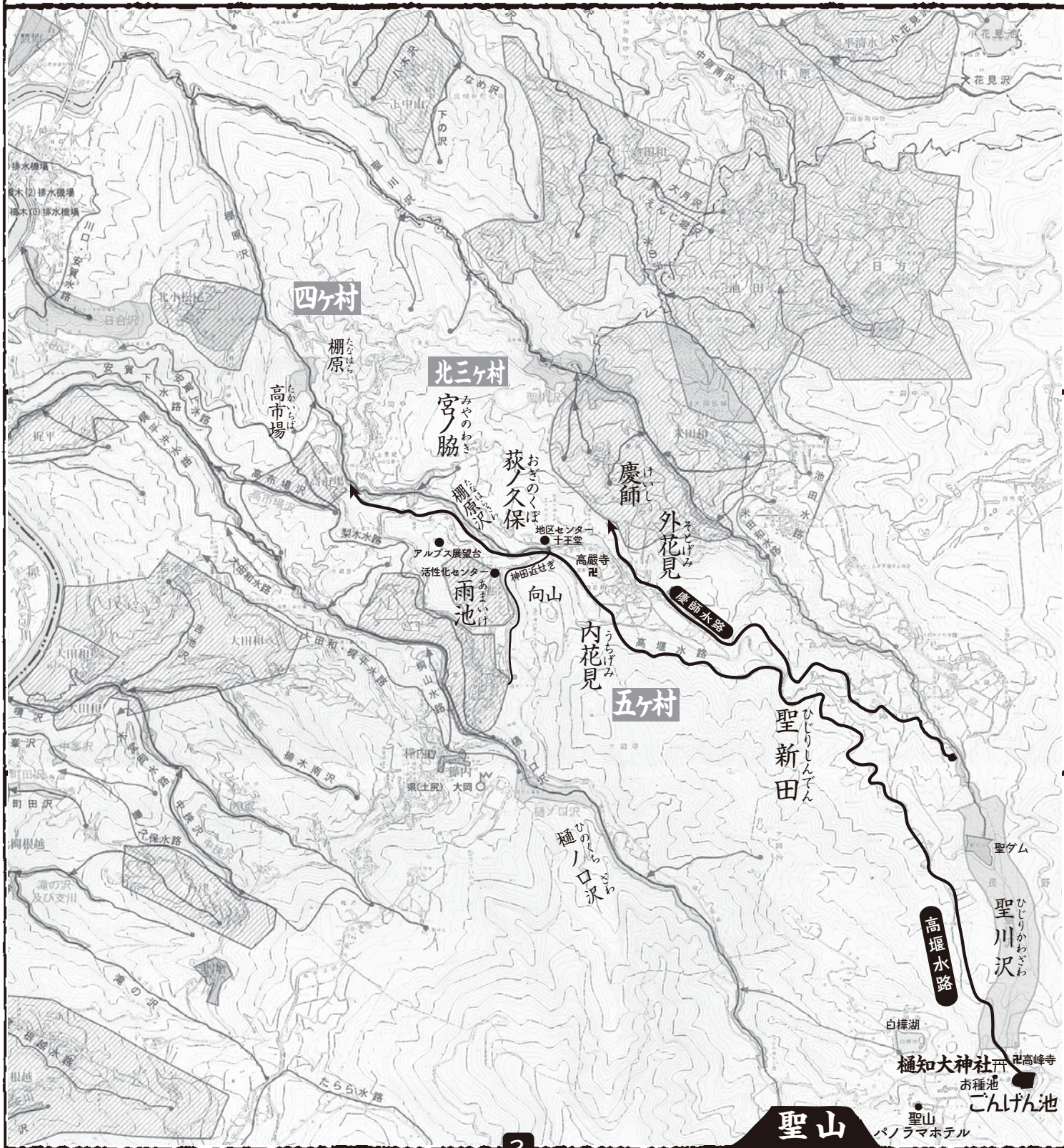
せげの旅

まっつてネ♡



源元(起点) こんげん池・御種池

- ◇こんげん池・高峰寺前のため池 ↓ 高峰寺前(中牧区との境) ↓ 早川道沿い、早川道・日本海に続く古道 ↓ 水道源槽(五ヶ村・四ヶ村) ↓ 聖開拓標石 ↓ 堰工事行われた形跡
- ◇青木鉄工所前 ↓ 聖新田早川道上 ↓ 山沿い ↓ 農免道上(分水して内花見水田を潤す) ↓ 内花見(農免道横切る) ↓ 向山すそ下
- ◇十王堂(内花見水田用水と再び合流) ↓ 棚原沢(分水・神田近せぎへ分水(五ヶ村活性化センター前) ↓ 神田近田へ一方は雨池地籍へ入る ↓ 四ヶ村の城ノ口(高市場) ↓ 北小松尾で終る



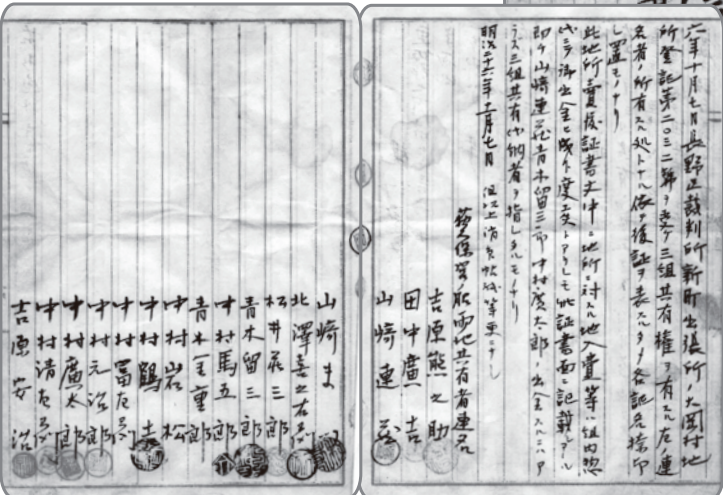
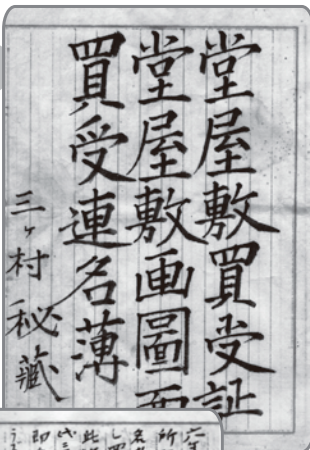
### ③ 雨池の観音堂

廃仏を逃れた先人の機知  
信仰の足跡が伝わる

◆雨池の観音堂には、激しい取り壊しが押し進められるなか、地域の人々が機知を聞かせ長く信仰されてきた観音堂を守った経緯を伝える「堂屋敷買受証・堂屋敷画面図・買受連名簿 三ヶ村秘蔵」が残されており、当時の廃仏毀釈の様子を推する貴重な史料となっている。秘蔵とされていたが、百年の時を経てたことようやく文書が姿を現した。



大岡は松代藩領であったため諸々の関係があったと思われるが、名を「某」と秘す士族は観音堂と縁があったのか、あるいは地区の人と親しい関係があったのかは、今となっては観音さまのみが知るところ…。



協力した人々の連名書きが残る。毎年春と秋にお祭りが続けられている。

◆「廃仏毀釈…はいぶつきしゃく」神仏を分離する運動で、特に明治維新後は政令によつて全国で押し進められた。国家神道が唱えられ、山岳宗教の特徴である仏像を神体とすることを禁止したため、地方の小さな堂宇も「取り壊し」の危機に面した。全国で古い建物が失われ、多くの仏像が縁ある寺院に渡されたり、売却されたりした。

◆この文書から、廃棄布告を受け、一旦この観音堂を「松代町士族某」が控え持つものとし、大岡の北沢喜之右衛門が明治十二年に買ったものとして廃棄の難を逃れ、後明治二十六年に元々この堂を共有してきた「雨池・萩久保・宮ノ脇」の村人が連盟で登記手続きをした経緯が伺える。

### ④ 十王堂と筆塚



形も判別できないくらい風化している。



堂々とした筆跡  
大きな筆塚。

#### 人びとを見守る 十王と地藏尊

◆「五ヶ村地区センター」の横には、赤い前掛けをかけて並ぶ石仏群がある。現在、小さいものも入れて二十九体。内花見の皆さんが昭和五十六年に、ここに檀をしつらえ再興した。それまでは地中に埋もれるなどしていた。今は毎年七月七日にお祭りをしてる。

◆江戸時代初期元禄二〇年（一六六七）の「松代藩堂宮改帳」五ヶ村周辺の記録に、  
花見村：「十王堂」「小聖権現堂」  
慶師村：「大明神宮」「みるく堂」「しゃろノ宮」  
宮脇村：「大明神宮」「小聖権現堂」  
萩久保村：「しゃろノ宮」  
が見え、これらが大変古いものと判る。また十王堂の記載は宮平村にも見える。

◆十王堂の辺りは棚原沢や高堰が通り、高厳寺方面を浄土地として、冥土の十王によつて業罪を明らかにし、賽の河原の地藏尊によつて救われ、聖地に渡る前に清められる。仏世界が配置されていたものと思われる。

#### 筆塚は寺小屋師匠の 遺徳をたたえる碑

◆十王と地藏尊石仏の前には、高さ二メートル以上、どっしりとした字で彫られた「筆塚」がある。弁天島の高厳寺第九世秀阿法印が文政六年（一八二三）頃から近所の子供に三十四年間読み書きを教え、門下たちが師の遺徳をたたえて建立した。

◆俳諧にたけていた秀阿は碑の裏に「義成」と雅号で記される。小川村金剛寺から来て、小川の小根山村山秋の生まれ。高厳寺本尊の観音宮殿も秀阿の時代に作られるなど寺の隆盛にも貢献した。

#### 子供が寺子屋 いっぱいいた時代

◆秀阿遷化の安政四年（一八五七）「筆子書留帳」には教え子一四〇人の名も記載されている。すべてが当時の教え子かは判らないが、地区別には  
宮平…三十三人、慶師…二十七人、上中山…八人、萩久保…七人、上栗尾…六人、宮ノ脇…四人、米田和…四人、雨池、浅刈、女蔵里、中ノ在家が記載される。すべて男子なので女子を加えると子供の声が賑やかな江戸時代の大岡が想われる。

# 5 樋知大神社郷宮 (里宮)

## 十の神楽と獅子舞 盛大な祭りで賑わった

◆樋知大神社郷宮は五ヶ村の人たちが祭礼で登るのはとても大変な場所、なかなか行けなかったため、郷宮として昭和初期に建立した。春と秋の例祭には、遠く声ノ尻からも神楽が出るなど十の神楽と獅子舞を奉納した時代もあった。当時は十王堂付近から出店屋台が長く並び、境内では奉納相撲や巡業の芝居なども行われた。

昭和二十四年の樋知大神社郷宮の秋祭りの様子。芝居を見る人々の向こうにいくつもの神楽屋台が見える。



『大岡村制行百周年記念写真集』より

## 社殿より古い 不思議な常夜燈

常夜燈は文化十癸酉(1813)くずし字で「常献燈」と彫られる。奉納者は大岡の住人のようだが村名が「神嶋村中」と彫られており、その経緯についてはよく解らない。



凜とした清楚な社殿。



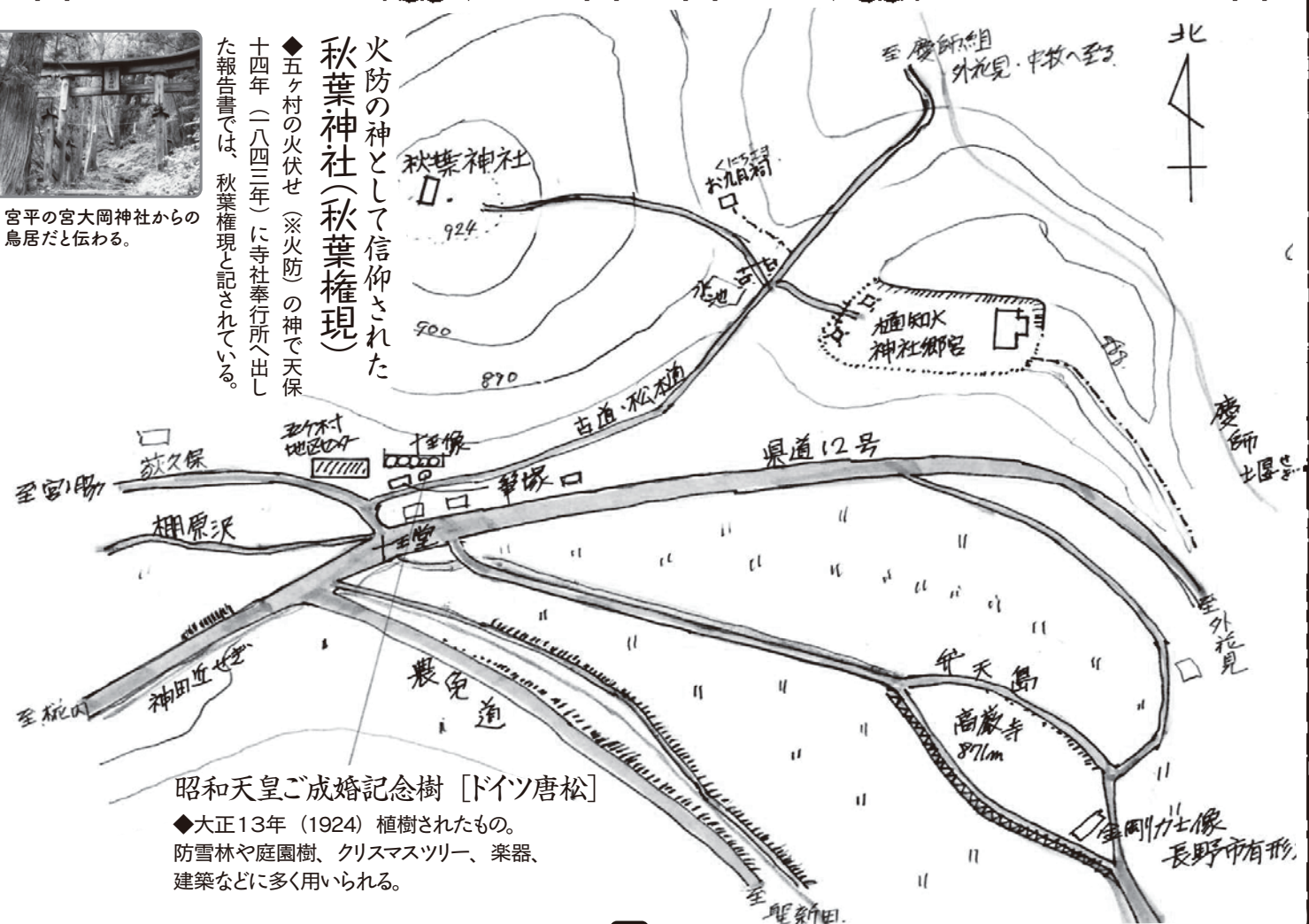
内花見の端下のじいさまが宮平から馬に引かせた荷車で持ってきたとも伝承される。向かいの「秋葉社」の鳥居は宮平の宮大岡神社の鳥居だという。



宮平の宮大岡神社からの鳥居だと伝わる。

火防の神として信仰された **秋葉神社(秋葉権現)**

◆五ヶ村の火伏せ(※火防)の神で天保十四年(一八四三年)に寺社奉行所へ出した報告書では、秋葉権現と記されている。



昭和天皇ご成婚記念樹 [トイツ唐松]

◆大正13年(1924)植樹されたもの。防雪林や庭園樹、クリスマスツリー、楽器、建築などに多く用いられる。

# 6 牛伏山・高嚴寺

(牛伏山弁照院高嚴寺)

古来、靈驗あらたかな地  
信仰と物語伝承の起点

◆宗派 真言宗豊山派(本山奈良・長谷寺)

◆本尊 十一面観世音菩薩(秘仏) 木像

厨子入立像三・七五尺(約二四〇cm)

前立本尊 十一面観世音菩薩木像

右脇立 不動明王木像

左脇立 毘沙門天木像

縁日 四月十八日

◆弁財天傳仏(べんさいてんせんぶつ)

縁日は七月七日。弁財天は八臂(はっぴ)で寺伝では弘法大師御作。傳仏(せんぶつ)はレリーフ形式の仏像、日本には七世紀に伝来。裏面に「天長七年七月七日 於江島辨財天法 秘密護摩 一万座奉修行 以其灰形像作者也 空海」とある。

◆仁王尊、金剛力士像は寺伝で弘法大師御作と伝わる(長野市指定有形文化財)

◎阿像(正面右) 大力をもつ神を意味、願いを叶えて、善を与える務め

◎吽像(正面左) 神の力をもって、人の迷いや悩みをよく聞く務め

## 寺伝

「本尊、正十一面観世音菩薩、当寺は、牛伏嶼(こま)にあり、遠(あ)らすに水を以てす。宛然(あたかも)小湖の如く、狐嶼(こじま)牛の伏せるに似たり、依りて此名ありと云う。時に人皇五十三代、淳和天皇の御宇、天長二年(八三〇)、弘法大師、相模国江の嶋

## 真言宗 牛伏山高嚴寺之景



本尊 正十一面観世音菩薩  
當寺ハ牛伏嶼ニアリ、遠ラスニ水ヲ以テス、宛然小湖ノ如ク、狐嶼牛ノ伏セルニ似タリ、依リテ此名アリト云フ、時ニ人皇五十三代、淳和天皇ノ御宇、天長二年、弘法大師相模国江ノ嶋ニ於テ、自ラ七牀ノ辨財天尊像ヲ作り、其一牀ヲ此地ニ安ジテ、牛伏山辨照院ト號セリ、所謂牛伏ノ辨財是ナリ、然ルニ康保二年ニ至リ、空上人、猶此處ニ一字ノ小堂ヲ造

宮十一面観世音菩薩及ヒ密迹、金剛ノ二王尊ヲ奉遷シ、更ニ牛伏山辨照院高嚴寺ト號セリ。再米幾春秋風雨霜露ノ爲ニ朽爛スルニ及ビ寛政九年、時ノ住職大ニ奔走シテ、檀徒ノ淨財ヲ募リ、茲ニ其再建ヲ見ルヲ得タリ、然シテ断惑ノ密迹生普ノ金剛ノ二王尊ノ如キハ、特ニ菩薩ノ宮門ニ安置シテ、衆生渴仰ノ便ヲ自由ナラシメ、久シク轉弊爲正ノ門ナリシガ、風霜又年アリ、表類破壊其堂威ヲ潰サンコトヲ恐レ、有信ノ輩カ喜捨ヲ集メ、再營シテ、今ニ至ル、靈塔古青ウシテ、風光ノ美アル者、又尊像ノ念ヲシテ、自

本堂 辨財天像  
庫裡 辨財天  
土御門  
二王門  
天満宮  
人家  
權現堂  
墓  
△カラ厚  
ナラシ  
ルニ足ル  
因ニ云フ  
伏辨財天  
尊像ハ其裏面  
天長七年七月  
日、於江島辨財天  
秘密護摩一万座  
修行、以其灰此形  
作者、出空海トア  
天長二年七月七日始  
七牀ノ辨財天像ヲ  
ル、當寺ノ尊像ノ如キ  
其ノテ、靈驗日ニ新ナ  
明治三十三年一月刻

## 秘仏御本尊 春日造厨子



御本尊の宮殿、厨子は「春日造り」で、文政五年(1822)第九世法印秀阿の代に再建されました。新造に関連した古文書「宮殿再興・新敷石造立入仏供養行列」が現存します。厨子の前立本尊後ろに扉があり、中に秘仏十一面観世音菩薩立像があります。厨子前の位牌は、領主・真田信濃守幸貫公のもので幸貫公は、善光寺大地震(弘化四年)のあった二年後大岡を巡視し、この寺に二泊しています。(※→8Pに詳細)

## 江戸時代の面影



上の図絵はかなり実見に基づいて調査し出版されたと思われます。図絵の中の「権現堂」は現在ありませんが、「堂屋敷」と呼んでいたところはほぼ現在と同じで、写真機のない時代の職人技です。また、「天満宮」が画かれている場所は向山畑と呼んでいる栗の畑の左上のところに今も石垣が築かれた原野があります。内花見の共同墓地とみられる松の木も描かれ、秋葉権現(秋葉神社)もあり、この図絵に収められた全景が、江戸後期からの全景に近いと思われます。

に於て、自ら七鉢の辨才天尊像を作り、其一鉢を此地に安じて、牛伏山辨照院と號せり。所謂牛伏の辨天是なり。然るに、康保二年に至り、空也上人、猶此処に二字の小堂を造営し、十二面觀世音菩薩及び密迹金剛の仁王尊を奉遷し、さらに牛伏山辨照院高嚴寺と號せり。再來幾春秋、風雨霜露の爲に朽頽するに及び、寛政九年、時の任職大いに奔走して、檀徒の淨財を募り、茲に其再建を見るを得たり。然して断惑の密迹、生善の金剛仁王尊の如きは、特に菩薩の宮門に安置して衆生渴仰の便を自由ならしめ、久しく転邪爲正の門なりしが、星霜又年あり。衰頽破壊、其靈威をけが瀆さんことを恐れ、有信の輩が喜捨を集め、再営して今に至る。靈場苔青うして風光の美ある者、又尊崇の念として自ら厚つならしむるに足る。因みに云う、牛伏辨才天の尊像は、其裏面に、天長七年七月七日、於江島辨財天法秘密護摩一万座奉修行、以其灰此形像作者也、空海とあり、天長七年七月七日初めて、七鉢の辨才天尊像を造る。当寺の尊像の如きは、其の一つにして靈驗日に新なり。」

(日本名跡図誌・第七編・信濃宝鑑)

明治時代後半まで「仁王門をくぐりぬけて清浄になつた人は、次には、眼病に、財宝に、所願成就の功德あり」と云われ「日本七弁財天」の「利益を浴びよう」と、縁日、毎年七月七日には、遠く川中島、松本から、宿泊しながら参詣に訪れたと伝えられている。

## 牛伏弁財天

金光明最勝王經に記されている八臂弁財天。江ノ島に同体の像がある。



裏面は手形紋と「天長七年七月七日 於江ノ島辨財天 法秘密護摩一万座奉修行 以其灰此形像作者也 空海」の文字がある。「信濃宝鑑」に「天長七年七月七日初めて、七鉢の辨才天尊像を造る。当寺の尊像の如きは、其の一つにして靈驗日に新なり。明治三十三年一月刷」と記されている。一般には弁天古象、護摩木の灰像座体とも呼ばれる。

寺宝の弁財天博仏(せんぶつ)を書き写した「お札」。弁財天の周囲には十六人の童子を従え福智を授与する。外に大黒天などもある。弁財天の左目がないのは眼病に対応した弁天で、信仰の核となっていたと思われる。江の島奉安殿の八臂弁財天と似る。明治28年提出「古社寺調査御届」には弁財天について、寺の起源に関係すると記載し報告している。



金剛力士の絵のお札。力強さがみみざる。



## 長野市指定有形文化財

明治10年8月(1877)仁王門を再建しようと当時第15世松本栄麟が世話人17人と寄付を募って回りました。その趣意書は版木摺りで残ります。それによるとこの仁王尊は弘法大師が作ったとされ、「長年雨風にさらされ大分傷んだので再建の運びとなった」と書かれています。完成落慶は、明治12年5月9日でした。



# 松代藩と高厳寺 八代藩主真田幸貫の 領内巡視

◆善光寺地震の災害直後、嘉永二年（一八四九）、八代藩主真田幸貫は、三回に分けて松代領内の巡視を行う。三回目、閏四月十四日から十六日の二泊三日で、桑原（千曲市）から大岡、新町、信更方面に向いた道順

## ◎第一日

松代城築→御小休所・桑原村本陣の柳沢量平  
↓御野立所・桑原村大田原村入会、↓御野立所・  
軽井沢村分地字・大花見池、↓御昼休所・中牧村  
の中村良左衛門、↓御宿・内花見・高厳寺。

## ◎第二日

御野立所・芦野尻村金毘羅社地、↓御野立所・  
笹久村白井沢村両村境字下原、↓御小休所・根  
越組門増村の頭立助左衛門、↓御小休所・大田和  
村の頭立伝七、↓御昼休所・川口村安賀組の頭立  
弥五兵、↓御宿・内花見・高厳寺。

## ◎第三日

御小休所・牧田中村・興禪寺、↓御野立所・  
牧野島村古城天神社地、↓御小休所・新町村出  
張御役所、↓御昼休所・上条村・源真寺、↓御野  
立所・吉原村分地橋場、↓御小休所・赤田村の苗  
字帯刀御免新井吉郎兵衛、↓御小休所・ニツ柳村  
方田組の健吾、↓御小休所・原村の小出祐之助。

◆この巡視は藩の絵師・青木雪脚を伴い、行程に沿った写実的な真景図を残している。図は六十七か所、そのうち大岡は滞在も長く藩主も雪山風景が気に入っていたのか災害報告から一歩脱して山里風景を入念に描いている。十番目に「内花見村高厳寺御入図」がある。

## 八代藩主真田幸貫公

江戸老中首座として寛政の改革を主導した白河藩主松平定信の次男で、徳川吉宗の曾孫に当たる。幕末に老中や海防担当職勤め、名君の一人と言われている。その幸貫公が、この寺に二泊されたことの意味は大なるものがある。この寺に宿泊された三年後には、ご逝去されて戒名は「感応院殿至貫一誠大居士」高厳寺の本尊の前におさめられている。

内花見村高厳寺  
御入図

真田宝物館蔵

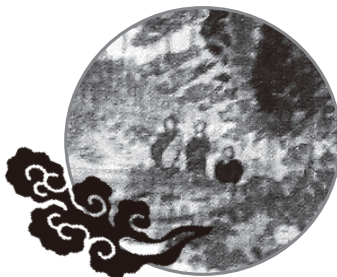


### 松代祝（ほうり）神社



大岡が松代藩の所領に入ったのは江戸時代以前からの経緯がありました。大岡から新町にかけてを所領とし拠点とした、真田氏と同じ滋野氏の一族香坂氏は武田信玄に無血開城し長年馴染んだ所領を手放し家臣一同と城下町（現在の松代）の設計に入りました。深い仏教信仰を背景に王政の復興も視野に各地と連携していた士族の大移動は、大岡にとっても大きな出来事だったと思われます。古いことで文書などは残されていませんが、松代藩以前に城郭の産土神とされていた「祝神社」の別当練光寺（明治に廃寺）と大岡の高厳寺とは関わりがあり、高厳寺再建前の古寺院名と思われる記載も残ります。

## 「真田丸」時代の宿縁



あたなたかな  
絵師のまなざし



寛政五年（1793）に高厳寺は松代藩から六文銭の紋幕と高張の使用を許され、藩と寺の関係は緊密にあったと思われますが、具体的な資料が寺にはありません。この絵図をみると寺の木陰から行列が到着するのを待つ僧ら三人が具体的に描かれています。絵師の青木雪脚はこの視察に同行し、細密な絵はその後再び逗留して描いたといえます。この三人を知る絵師が藩主に報告する絵図にあたたかなまなざしを注ぎ込んでいることは注目されます。